

## 非英語系学科学生の海外研修に関する考察

名古屋女子大学家政学部家政学科の「異文化コミュニケーション」

羽澄 直子

### On Study-Abroad Programs for Non-English Major Students : “Intercultural Communication” at Department of Human Life and Environmental Science, Nagoya Women’s University

Naoko HAZUMI

#### 1. はじめに

現在多くの日本の大学では、何らかのかたちで海外研修がカリキュラムに取り入れられている。<sup>1</sup> 筆者の勤務する名古屋女子大学（以下本学と記す）でも現存する3学部（家政学部、文学部、短期大学部）すべてにおいて海外研修が実施されている。平成17年度のカリキュラム上の名称は、短期大学部生活学科が「海外総合演習」、家政学部食物栄養学科が「栄養士海外研修」、生活環境学科、家政学科、生活福祉学科がそれぞれ「異文化コミュニケーション」、文学部が「異文化間コミュニケーション」（国際言語表現学科と児童教育学科がそれぞれ別のプログラムを作成）および「比較文化実習」となっている。ただし平成17年度に開設された生活福祉学科の場合、海外研修は平成18年度開講の予定である。研修期間は単位数（2単位または4単位）に応じて3週間から5週間。実施時期は学生の夏期休暇または春期休暇期間である。

研修形態は大きく分けると二通りとなる。一つはヨーロッパ諸国を巡る短期大学部の「海外総合演習」や、中国や韓国の各地を訪れる文学部の「比較文化実習」のような移動型の研修である。もう一つは一か所で数週間ホームステイや寮生活をしながら教育機関の授業に出席する定住型の研修である。食物栄養学科の「栄養士海外研修」、生活環境学科、家政学科、生活福祉学科の「異文化コミュニケーション」、文学部の「異文化間コミュニケーション」がこの形態を取っており、研修先にはアメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダといった英語圏が選ばれている。

移動型の研修が、主に史跡、施設の見学を通して（一部実習もあるが）、学科の専門性に関わる分野の知見を深めることを目的とするのに対して、定住型では専門関連の知識に加え、異文化理解を高めるための外国語（英語）運用能力を身につけることも重要な目的となっている。したがって研修先は英語圏であり、現地の人たちと交流し日常生活で英語を使う体験ができるホームステイが採用される場合が多い。語学習得をより効果的なものにするために、午前または午後半日の語学の授業がおこなわれ、もう半日が学外での活動（専門分野の研修など）に当てられるプログラムが主流である。さらに文学部児童教育学科主体の「異文化間コミュニケーション」では、現地（オーストラリア）の小学校や幼稚園でのインターンシップという実地訓練を通して、幼児や児童への英語教育に対処できる語学運用能力や、国際理解教育に携わる力量の向上を図っている。

本学における移動型と定住型の研修の違いの一つは語学学習の有無であるが、定住型の中で

も専門性の追求と語学学習の比重については各学科で異なっている。食物栄養学科の管理栄養士、児童教育学科の保育士、幼稚園、小学校教諭のように、学科の目指す専門性がほぼ単一に絞られているところでは、学生のニーズに応じた専門との関連性を研修の中に取り入れやすい。したがって専門の比重の高い、学科の特色を全面に押し出すような研修内容にすることはそれほど難しくはないと思われる。しかし筆者が「異文化コミュニケーション」を担当した生活環境学科、家政学科では、学生の専攻が家政一般の多岐にわたるため、一つの分野には特化しづらい。そこでこれらの学科の海外研修は、異文化理解と語学学習に比重を置く内容にしてきたが、そうすると今度は異文化に興味はあるが英語は専門外で苦手だからと、学生が敬遠する傾向も現れる。

このような現状のなか、学生にとってより有意義な研修を目指して試行錯誤を続けながら、家政学科の「異文化コミュニケーション」は平成17年度で8回目を迎えた。参加人数は毎年20人前後と決して多くはないが、受講者の満足度は高く、複数回参加する学生もいる。筆者の担当は平成13年度(第4回)から17年度(第8回)であり、引率は平成13年度、15年度、17年度である。本稿では家政学科が海外研修を導入した過程をふまえて、平成13年度から17年度の研修について、プログラムの内容、受講者の意識、受講者への指導などについて検証し、これからの学科にふさわしい研修のあり方を考えていきたい。

## 2. 家政学科の海外研修導入の過程

現在の生活環境学科と家政学科の海外研修(異文化コミュニケーション)の設置を検討する委員会が立ち上がったのは平成8年である。当時は生活環境学、生活経営学という2つの専攻を持つ家政学科であった。研修形態、時期、行き先などについて2年の検討期間を経て、第1回異文化コミュニケーションが実施されたのは平成10年度だった。平成12年度には専攻が解消され、生活環境学科と家政学科という2つの別学科に分離したが、異文化コミュニケーションはそれぞれのカリキュラムに引き継がれた。別学科になった後も独自の研修ではなく、2学科合同での開講が続いている。

海外研修の目的については、当初は専門性との関連を求める意見も出ていたようだが、討議の結果「異文化とのふれあい」に重点を置くものとなった。<sup>2</sup> 家政学科の独自性としては、学外での活動に衣食住など家政学関連の研修を積極的に取り入れて、英語系学科(当時の文学部英語英文学科および短期大学部英語科)の語学研修との差異を図るカリキュラム案が出された。研修先の選定については、複数の旅行社によるプレゼンテーションの後、ボストン、セントルイス(以上アメリカ合衆国)、バンクーバー、トロント(以上カナダ)の大学への下見がおこなわれた。

第1回の研修先は下見での評価の高かったアメリカのウィリアム・ウッズ大学(セントルイス郊外)とカナダのコクイット・ラム大学(バンクーバー郊外)に決められた。ウィリアム・ウッズは平成4年から文学部英語英文学科の語学研修を受け入れている実績があり、平成7年には本学の協定校になっている。コクイット・ラムではホームステイ、ウィリアム・ウッズでは「キャンパスライフを中心に」ということで大学の寮に滞在し、週末のみホームステイを体験した。平成17年度までの研修先は次の通りである(HSはホームステイを表す)。

第1回(平成10年度) ウィリアム・ウッズ大学 平成11年2月28日～3月18日

- 第2回(平成11年度) コクイット・ラム大学 平成11年2月26日～3月16日(HS)  
 ウィリアム・ウッズ大学 平成12年3月12日～3月28日  
 ノース・ポイント・ターフ(オーストラリア・クイーンズランド州)  
 平成12年2月22日～3月15日(HS)
- 第3回(平成12年度) カルガリー大学(カナダ・カルガリー)  
 平成13年2月23日～3月17日(HS)  
 職業体験と課外活動のどちらかを選ぶ4日間のインターンシップを含む。職業体験はホテル、ブライダルショップ、カフェ、衣料品店など。課外活動は福祉施設訪問、小学校訪問、料理講座など
- 第4回(平成13年度) バララット大学(オーストラリア・バララット)  
 平成14年3月14日～4月1日(HS)
- 第5回(平成14年度) ウーロンゴン大学(オーストラリア・ウーロンゴン)  
 平成15年2月22日～3月14日(HS)
- 第6回(平成15年度) ウーロンゴン大学 平成16年2月21日～3月12日(HS)
- 第7回(平成16年度) ウーロンゴン大学 平成17年2月19日～3月11日(HS)  
 ロードアイランド造形大学(アメリカ・プロヴィデンス)  
 平成16年7月31日～8月18日
- 第8回(平成17年度) ロードアイランド造形大学 平成17年7月31日～8月19日

第4回から第7回のウーロンゴン大学での研修は、短期大学部英語科と合同で実施された。平成13年度の英語科のアメリカ研修がテロの影響で中止となったため、英語科の学生と一緒に参加させてもらえないかとの要望があったためである。研修立案や学生指導の面から合同で開催することの利点は多く、翌年以降もこの協力体制が続けられた。英語科は平成17年度で廃止となるため、合同開催は平成16年度で終了した。平成16年度のロードアイランド造形大学の研修は、金城学院大学生活環境学部環境デザイン学科主催の研修に、本学の学生が参加する形で試験的におこなわれた。そして平成17年度の第8回から本学家政学科、生活環境学科の「異文化コミュニケーション」として本格的に実施されることとなった。金城学院大学との合同開催である。このロードアイランド造形大学での研修は、住居やインテリアの勉強を中心としたもので、従来の研修とは異なる形態である。詳細については後でまた述べることとする。

### 3. 海外研修に参加する学生の意識

外国語や外国文化を専門としない学生は、大学の授業の一貫としての海外研修に何を求めているのであろうか。彼女たちが研修に参加する動機、目的を知るとは、プログラムを作成する上で重要である。そこで筆者が「異文化コミュニケーション」を担当した平成13年度から16年度に研修に参加した家政学科および生活環境学科の学生に、参加理由と、専門との関連性についての調査を行った。研修への参加人数は延べ59名(2名が2度参加)。アンケート有効回答者数は49。質問項目は外国へ行った経験の有無、参加理由、専門性との関連、研修期間と時期についてである。

大学の研修に参加する前に海外へ行った経験のある者は19名であった。そのうち英語圏でホームステイをしたことのある者は7名で、残りはアジア諸国やグアム、ハワイなどへの短期の家

族旅行である。したがってこの7名を除く42名(全体の約85%)が、学習を目的とする海外生活を経験したことがない学生である。

参加の理由の集計結果は次の通りである(3つまで選択可)。

表1 海外研修に参加した理由

理由	人数	割合
英語が上手になりたい	20	40.8%
外国旅行がしたい	9	18.3%
外国で暮らしてみたい	14	28.5%
外国の大学生生活を体験したい	15	30.6%
ホームステイをしたい	36	73.4%
外国の人たちと知りあいたい	23	46.9%
外国の文化を学びたい	19	38.7%
単位が欲しい	2	4.1%
その他	4	8.2%
計	142	289.5%

母数は有効回答者数

ホームステイプログラムなので、ホームステイを参加の理由に挙げる数が多いのは当然であろう。「外国の人たちと知りあいたい」割合が高いことは、参加者が人々とのコミュニケーションの機会を主に求めていることを示している。単なる外国旅行ではなく、その地で生活し、異文化を吸収したいという意識も高い。また英語の上達も参加の主たる動機となっているようだ。

「異文化コミュニケーション」と学科の専門性の関連は強いほうがいいかという質問に対しては、「強いほうがいい」4名(8.2%)、「強くなくてもいい」33名(67.3%)、「どちらともいえない」12名(24.5%)であった。アンケート対象者が参加した研修では英語科との合同という事情もあり、家政の専門性に関わる課外活動は福祉施設訪問やクッキング講座程度で、他は小学校での日本文化紹介や乗馬体験など、専攻に関係なく取り組めるものを中心であった。「どちらともいえない」という回答を含め、専門との関連性を特に求めない割合が90%以上にのぼるということは、現行のプログラムが参加者のニーズと外れてはいないことを示しているといえるだろう。

研修期間は「もっと長い方がいい」26名(53%)、「現行(3週間)のままでいい」23名(47%)で、両者の数字は接近している。「もっと短く」と答えた者はいなかった。ただ具体的な「もっと長い期間」というと、1カ月程との回答が多かった。これは研修が休暇期間におこなわれるため、長くてもせいぜい6週間しか期間を確保できないからだろう。また数カ月～1年の長期を望む学生は概して、団体での研修ではなく個人で行く留学を目指している。研修時期については夏休み希望者が4名だが、そのうち2名は現行の春休みも支持している。残りはみな春休

みでよいとの回答だった。研修時期についてはほぼ現行のままの問題ないと思われる。担当者としても、研修前の準備期間をより長く取れる春期の方が実施しやすい面がある。

#### 4. 学生への事前指導

参加者への事前指導は、海外での研修を安全で実りあるものにするためには欠かせないものである。事前指導の効果に関する小池の調査(2002)によると、海外研修に参加する高校生のうち、事前授業を意義あるものと考え積極的に取り組んだ生徒ほど、研修の初期に否定的な情動を強く感じるという。一見事前授業の効果を疑問視するような結果だが、これは事前に研修先の文化や生活事情を知り、異文化との接触について学習することで問題意識が高まるため、異文化体験に敏感に反応するからだとして小池は分析する。このような生徒は、一旦は困難を感じるものの、事前に得た知識をもとにほとんど問題を解決し、結果的にはより深い異文化理解を身につけて有意義な交流が果たせるという。<sup>3</sup> 事前授業を軽視して研修にのぞむ者は、研修先の諸事情について無知で問題意識も低いいため、異文化接触が引き起こす摩擦や困難にかえって鈍感で、結局は享樂的で皮相な経験しか得られない。

本学の家政学科、生活環境学科の参加者の場合、8割以上が海外研修未経験である。しかも英語系の学科と違い、英語の授業は1・2年次に各2科目のみであるし、海外事情や異文化について学ぶ授業はカリキュラムの中にはほとんどない。したがって事前授業の重要度は極めて高い。渡航の手順などの実務的なことから、海外滞在時の注意事項、研修先の文化、生活事情に関する講義、ホームステイの注意事項、英語のレッスンなど、伝えるべき内容は多岐にわたる。引率者にとっては、普通の授業などで接したことのない学生も参加するので、事前授業は彼女たちの特質などを把握する貴重な場となっている。

残念ながらこれほど重要にもかかわらず、本学ではカリキュラムの関係で、事前授業の時間を十分に確保することは難しい。両学科の「異文化コミュニケーション」は特別授業の扱いなので、通常的时间割の固定された時限には組み込まれていないからだ。そのため事前授業の日程は、担当教員と学生の空き時間を調整して設定しなくてはならないが、受講者が2学科3学年にわたるため、共通の空き時間をみつけるのは容易ではない。筆者の担当年度では、昼休みや冬期休暇中の集中講義を含めて7回の開講を設定したが、平成16年度にはどうしても全受講者の日程が合わない時があり、同じ内容で週3度開講したこともあった。

7回の授業の内容は年によって多少の違いはあるがおおよそでは、ホームステイ指導が2回、研修先の文化、生活事情に関する講義が1回、渡航手続きの説明と旅行全般の注意に2回(1回は昼休みを利用)、小学校訪問での日本文化紹介の準備に1回(集中講義)、最終説明会1回である。限られた日程の中でホームステイ指導を優先したのは、事前の指導や準備が不足していると、ホストファミリーと思われぬトラブルを起こしかねないからである。

授業ではまず、ホームステイ用の英文申込書を作成させる。英語系学科の学生であれば、見本を渡しておけば後はほぼ自力で作成できるが、英語に不慣れな学科の学生には授業時間内での直接指導が必要となる。次にホームステイ先で遭遇しそうな事例を紹介し、それにどう対処するかを質問シートに記入させる。質問シートは短期大学部英語科の語学研修の指導で使っていたものを家政用に若干改訂した。事例はすべて実際に英語科の学生が体験したことである。質問項目は次のとおり。

1. ホームシックにかかったらどうするか。
2. 現地の食事が口に合わなかったらどうするか。
3. ホームステイ先で夕食後、ホストファミリーが居間へ行き難しくて理解できないテレビ番組を見はじめたらどうするか。
4. ホストファミリーの子どもがあなたの部屋に勝手に入ってものにさわったことがわかったら、どうするか。
5. ホストファミリーからお金を貸して欲しいと言われたらどうするか。
6. 週末にホストファミリーが別行動して、あなたが一人で家に取り残されたらどうするか。
7. ホストファミリーが親しくしてくれなかったらどうするか。
8. 次の項目で我慢できないことはどれか。
  - (1)通学時間が長い (2)時々一人で食事しなければならない
  - (3)いつも自分で朝食をつくる (4)シャワーしかない
  - (5)部屋の掃除を自分でする (6)毎日皿洗いをする
  - (7)ホストファミリーが毎日9時に寝る (8)子どもがうるさい
  - (9)ホストファミリーの子どもと同室
9. どのような場合にホストファミリー先の変更を求めるか。

これらの項目に対しては絶対的な正解というものはないが、授業では学生たちの回答例を比較検討させ、よりよい対処方を考えてもらうようにした。

具体的な注意事項については、英文の「ホームステイの心得」を利用した。ところどころが空所になっているクイズ形式で、これも英語科で使われていた教材である。内容は挨拶のしかた、バスルームの使い方や食事のマナーといった日本とは異なる習慣、ホストファミリーに対する態度(家族の一員として積極的に家事の手伝いをするなど)に関するところで、注意事項と共に英語表現も学べるものである。

ホームステイ指導で学生に一番強調したのは、ホストファミリーは千差万別ということだ。学生が描くホストファミリー像は概して「父親と母親と子どものいる白人家庭」であるが、本学の学生のホストファミリーでは、このような家庭はむしろ少数派かもしれない。多文化社会を反映して、家族構成や経済状態、人種はさまざまであることを認識しておかないと、自分のホストファミリーと友達のところを比べては、いたずらに不満をつのらせることにもなりかねない。

海外研修に行く前に学生が不安に思うことの一つは、自分たちの英語力である。したがって事前授業での英語指導への要望は高い。英文のホームステイ心得を読ませる以外には、ホームステイ先や観光で使えそうな、あるいは使うと想定される英文をたくさん作らせた。またオーストラリア研修の場合は、特徴あるオーストラリア英語の聞きとりをさせた。しかし限られた回数の中では英語指導の時間は十分に取れず、これらの学習はほとんどが宿題となる。昨今はあらゆるレベルの英会話教材が出ており、自習の手段はいくらでもある。その中から自分に合ったものを選んで学習したり、中学のテキストを復習するよう学生には指示しているが、自主的に勉強することが苦手な学生も多い。学生の要望で昼休みにミニ英会話教室を何度か開いたが、これは熱心な学生のためである一方、自習が苦手な学生のためでもある。研修終了後の学生に共通する感想は、ホームステイで英語力の不足を痛感したので事前にもっと勉強しておけばよかった、というものである。現状では授業時間の確保が困難である以上、自主勉強のサポート

を強化することが、学生の英語力向上の鍵になると思われる。

## 5. 新しい研修形態

平成17年度の「異文化コミュニケーション」は、夏期休暇期間にロードアイランド造形大学（Rhode Island School of Design. 以後RISDと記す）でおこなった。これは前述のとおり、平成16年度に金城学院大学の研修へ本学の学生を4名参加させたことをきっかけに、本学家政学科、生活環境学科の「異文化コミュニケーション」として本格的に実施したものである。本学からの受講者は10名、金城学院からは8名で、両大学の教員が同行した。内容は建築やアパレルに関するもので、語学の授業はない。授業には通訳がつく。滞在先は学生寮だが、夏期休暇中なので造形大学の学生は不在で、ほぼ研修生たちが独占して使用することとなった。週末にはアメリカ人の家庭で一日を過ごすホームビジットを体験した。

授業は講義形式ではなく実技が中心で、4つのグループに分かれてそれぞれがアイスクリーム・パーラーを作るという課題が出された。店のコンセプト、店名、ロゴ、外観、内装、家具、従業員のユニフォームなどを決め、平面図や立面図などを描き、プレゼンテーションボードを作成する。最終日にはボードを使って英語でプレゼンテーションをするという、短期間でこなすにはかなり過酷なプロジェクトであった。日本の大学とは異なる進め方に、学生は最初戸惑いを見せていたが、グループで討議を重ねながら作業に取り組んでいった。研修終了後の感想は全員「大変だったけれど充実しており、達成観を得られた」というものであった。また他大学の学生との交流も、双方の学生にとってよい刺激になったようだ。

RISDでの研修は、定住型でありながら語学学習をとまわず、学科の専門に特化され、時期も夏期という点で、従来の「異文化コミュニケーション」と大きく異なる。この研修の実施は、学科再編成という事情に負うところが大きい。現行の家政学科は平成19年度で終了し、後続の生活福祉学科は福祉に関する独自の海外研修を企画しているため、今後は生活環境学科も単独で研修を立ち上げなくてはならない。学科の特徴をアピールするには、通常の語学研修よりも専門性を重視したものの方がよい。RISD研修のように住居やアパレルデザインを中心とした海外研修は企画の難しさから他にあまり例がなく、希少価値は高い。本学と似たカリキュラムを持つ金城学院大学生生活環境学部環境デザイン学科との共催が可能なので、企画等にかかる時間的負担も軽減できる。事後のレポートを見るかぎり、16年度、17年度に参加した学生の満足度は高い。

RISD研修には語学の授業がなく、授業時に通訳がつくため、英語は苦手という学生も参加しやすかったと思われる。ただし買い物などでは当然英語が使われ、プレゼンテーションも英語だったため、学生はホームステイや語学研修でなくとも英語の必要性を痛感したようだ。今回の事前授業では、従来の英語指導はおこなわなかったが、今後はこの研修に則した英語指導も必要であろう。

## 6. おわりに

平成17年度のRISDでの研修は担当者の目から見ると、学生の反応も含め成功裏に終わったといえるが、今後継続していくのであれば、検討すべき課題は多い。前述のアンケートでは、海外研修に学科の専門との関連を求めず、春期実施を支持する回答が多かった。この結果は専門

に特化しない春期研修参加者を対象にしているためとも考えられるが、RISDの研修形態はアンケートから読み取れる学生のニーズとは相いれない部分が多い。したがってどれほど良質で、体験した学生の満足度が高くとも、参加者の増加は見込めない恐れがある。また夏期は旅行のピークシーズンであるため、春期に比べて研修費が高い。従来の春期研修は約35万円だが、夏期は約50万円である。参加しやすい料金にするためには、春期に移すことも含めて日程や授業内容の再考が必要だが、寮を使用するのであれば先方の事情もあり春期開催は難しい。参加者が少なければ研修そのものが成立しない。金城学院との共催の理由の一つは、研修成立に必要な参加者数を確保するためなのである。

専門性と関連したプログラム設定の難しさもある。今回は住居専攻の学生が多く、内容も住居中心だったので、アパレル専攻の学生には多少困難があったようだ。また本学も金城学院も家政学系であるのに対し、RISDは美術系なので、研修先が提供できる授業の内容が、本学の学生の知識や技術とは必ずしも一致しないことがあった。17年度RISD研修参加者へのアンケートでは、研修内容に満足しているにもかかわらず、回答者10名のうち3名が「専門性との関連は強くなくてもよい」(住居系2名、アパレル系1名)、1名が「どちらともいえない」(住居系)と答えている。美術系のRISDのプログラムは、むしろ本学の短大生活学科生活創造デザイン専攻の学生に向いているのかもしれない。

「異文化コミュニケーション」をより多くの学生のニーズに合わせたものにするには、RISD研修のような専門領域を中心にしたものと、従来の異文化理解と英語中心のものを両方設定するのが理想であろう。第1回と第2回の研修ではすでに2種類のプログラムが実行されているので、指導や引率の人員が確保できれば夏春2種類の実施は不可能ではないが、現状の体制では難しい。どちらかを選ぶのであれば、特徴あるRISD研修のようなプログラムを継続して、改組後の新しい生活環境学科の研修と位置づけていってもよいのではないか。<sup>4</sup> 学科の専門性を問わない語学研修は他学科との合同開催、あるいは全学共通で企画することも今後検討する価値があるのではないかと考える。

本稿作成にあたり、家政学科第3回研修までの資料は本学教員の平林進氏、岩田浩子氏に、ウィリアム・ウッズ大の資料は石川和代氏にお借りした。また事前指導の教材は主に石毛恵美枝氏、ダグラス・ジャレル氏が作成したものを使用させていただいた。付記して謝意を表わす次第である。

#### 注

1. 平成17年度は愛知県内では私立大学41校のうち、33校で海外研修が実施されている。
2. 「異文化コミュニケーション検討委員会議事録」(平成8年～9年)。
3. 小池浩子「短期異文化接触における異文化の捉え方と事前研修の受講者評価：高校生の国際交流を通して」2002年度異文化コミュニケーション学会年次大会(2002年6月29日)口頭発表。
4. ただし現行のRISD研修では、改組後の生活環境学科に加わった食分野のコースを選択する学生には対応しにくいと考えられる。

#### 参考文献

Shames, Germaine W. *Transcultural Odysseys: The Evolving Global Consciousness*  
Yarmouth: Intercultural Press, 1997.

小池浩子「短期異文化接触における異文化の捉え方と事前研修の受講者評価：高校生の国際交流を通して」

2002年度異文化コミュニケーション学会年次大会 桜美林大学 2002年6月29日

坂田浩「日本人大学生の異文化感受性レベルに関する一考察」『異文化コミュニケーション』No.7 2004 137-157

### Abstract

The aim of this study is to investigate how the study-abroad programs for non-English major students have been planned and carried out in the Department of Human Life and Environmental Science(HLES)and the Department of Life Studies and Environmental Science(LSES),Faculty of Human Life and Environmental Sciences. The program started in 1998. I have been in charge of “Intercultural Communication”(study-abroad program)for these two departments since 2001.

It has been thought to be difficult to plan a study-abroad program which can satisfy as many students who want to learn their specialties as possible; for these departments have several different majors. The study-abroad tour started, therefore, with more general contents so that any student could easily join it regardless of their majors. The main purpose of the program is to let the students experience life in a foreign country. It includes homestays, English classes at university, and activities which cannot be experienced in Japan.

Pre-departure training is very important for non-English major students because there are few classes on intercultural issues in their regular curriculum. In my special pre-departure training classes, a lot of time is spent on preparing for homestay so that the students can avoid trouble and have a good time with their hostfamilies.

Besides the regular program, the two departments launched a new type of study tour at Rhode Island School of Design, USA, in 2004. The participants study architecture, interior design and apparel design as well as English. Though there are some problems to be solved, this unique program could become a special feature for HLES, which was reorganized in 2005.